

Resignation の説

森鷗外

現代の思想とか、新しい作者の発表している思想とか云うものについて話せというのですか。それは私の立場として頗^{すこぶ}る迷惑です。

もし私が現に批評壇に立っている諸君と同一な思想を持っていたなら、別にそれを発表する必要がないわけでしょう。もし変った思想を持っていたなら、それを発表した結果がどうなるでしょうか。

それについては多少の経験を持っています。ついどうかした機会に何か言うことがある。そしてその都^{つど}度不愉快極まる反響を聞くのです。

昨今は私が何か云うと、愚痴とか厭味^{いやみ}とか云ってか

らかわれることになっている。それだけで何の効果もない。何の役にも立たない。人に利益は与えずに、自分が不愉快な目に逢うのみです。そんなことは私だつてしたくはないのです。

現在の文芸界では active に何かしている、重立った諸君は極まっています。田山君とか、島崎君とか、正宗君とか、それから少し後に仲間入をしたような小山内君とか、永井君とか云うような諸君でしょう。それと少し距離のある方面で働いているのは夏目君に接近している二三の人位なものでしょうか。小説以外の作品を出していられる諸君は数えません。

そこで私がそう云う諸君の下風に立っていて、何だか不平を懐いだいているものでも認められていられるらしく見えます。私の言うことを愚痴、厭味と極められてい
る意味はそう云う意味かと思ひます。

おおかたこんなことを言えば、すなわ即ちそれが厭味だと云うかも知れません。然らば口を閉じるより外はないようなものです。

所が、私の考えている事は全く違っています。尤もこの考えている事というのが、告白であるかないか、ぎようじやく矯飾きようじやくをしていないかという疑問が直ぐに伴つて来る。もつと立ち入つて云えば、自分では云々と考えている

と思つても、それは自ら欺いている、即ち自己のために自己を矯飾しているのかも知れない。そんな風に穿鑿せんさくして見ると、むしろ頭からその考えている事を言わずに置くのが好いかも知れないのです。

しかし何と云われたつて、云われついでだから云いましょう。私は田山君のように旨うまくないと云われても、実際どうでもない。田山君も、正宗君も、島崎君も私より旨くて一向差支さしつかえがないように感じています。それは私の方が旨くても困りはしません。しかしまずくても構いません。ちつとも不平が無い。諸君と私とを一しよに集めて、小学校のクラスの座順のように並ば

せて、私に下座に座ってお辞儀をしろと云うことなら、私は平気でお辞儀をするでしょう。そしてそれは批評家の嫌う石田少介流とかの、何でもじいつと堪えていゝるなんぞと云うのではありません。本当に平気なのです。

私の考では私は私で、自分の氣に入つた事を自分の勝手にしているのです。それで氣が済んでいゝるのです。人の上座に据えられたつて困りもしないが、下座に据えられたつて困りもしません。

こう云う心持は愚痴とか厭味とか云う詞ことばの概念とは大へんに違つていゝると信じています。いつか私は西

洋にある詞で、日本に無い詞がある、したが随したがつてそういう概念があちらにあつて、こちらに無いと云うような事を話した事がありました。たとい縦令たとい両方にその詞はあつてもそれが向うでは日常使われているのに、こちらでは使われていないという関係もあるのです。これは確に思想の貧弱な徴候だろうと思ふのです。

批評壇が、時を得ていない人は、時を得ている人に対してきつと不平を懐いていて、そんな人の云うことは、厭味、愚痴の外にないように思ふのは、批評家の思想の貧弱ではあるまいかと思ふのです。

私の心持を何という詞で言いあらわしたら好いかと

云うと、resignationだと云つて宜しいようです。私は文芸ばかりでは無い。世の中のどの方面においてもこの心持でいる。それで余所よその人が、私の事をさぞ苦痛をしているだろうと思つてゐる時に、私は存外平氣でゐるのです。勿論 resignation の状態と云うものは意気地の無いものかも知れない。その辺は私の方で別に弁解しようとも思いません。

こんな事を言つてゐると、お尋ねに対しては何も言わないで、身勝手ばかり云つてゐるようですが、先ず立場から極めて掛らなくては、何も出来ないのです。しかしこの立場はやはり一般に認めて貰もらう事は出来ない

いでしよう。私のこれまでの経験によれば出来ないものだと前から極めて置いてても差支えなさそうに思われます。

私だつて色々言いたい事もありますが、先ず今日は自分の立場の事だけで御免を蒙こうむりましょう。多分これも雑誌へお出しになったら、またあいつが愚痴を云う、厭味を言うという事になつてしまいましたよ。

所詮駄目しよせんですね。

どうぞこんな下らない話でも、出すならそつくり出して下さい。此頃は談話このしりごとの校正をさせて貰う約束をしても、ほとんど全くその約束が履行せられないことに

なつて来ました。話には順序や語気があつて、それの意味が變つて来ます。先ず此頃談話して公にせられるものは、多くは本人の考とは違ふものだと承知していた方が確なようです。先日文章世界では千葉君に氣の毒な思をしましたよ。どうぞそんな間違の無いように、この話はこのままそつくり出して下さい。

(明治四十二年十二月)

底本：「歴史其儘と歴史離れ 森鷗外全集14」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版森鷗外全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～9月

入力：大田一

校正：noriko saito

2005年8月19日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。